

歴史都市・京都創生策Ⅱ

<総論編>

平成18年11月

京都市

目 次

| | | |
|---|-------------------------|----|
| 1 | 京都創生とは | 1 |
| 2 | 京都にとっての意義 | 3 |
| 3 | 国にとって必要である理由 | 5 |
| 4 | 歴史都市・京都創生策Ⅱのあらまし | 6 |
| | (1) 歴史都市・京都創生策Ⅱの位置づけと構成 | |
| | (2) 歴史都市・京都創生策Ⅱの目標 | |
| 5 | 京都創生の実現に向けて | 10 |

1 京都創生とは

1200年を超える悠久の歴史の中で磨き上げられた文化と景観が息づく山紫水明の都市・京都は、先人達が永年にわたり、守り、育ててきた日本文化の精華です。京都は、日本を特徴づける「和」の美意識の発祥の地であり、今も新しい日本独自の文化を産み出し続ける創造の地でもあります。この意味において京都は、京都市民のみならず日本人共通の財産なのです。また京都は、世界各地から伝わった多様な文化が、その姿を今に残しながら重層的に生き続ける世界でも稀有の都市であり、世界の宝といえます。

「京都創生」とは、日本の財産であり、世界の宝でもある京都の文化と景観を守り、育てるとともに、その魅力を日本中、世界中に発信していく取組です。京都を守り、育てていくことは、市民自らの誇りやアイデンティティーの維持・確立などの観点から重要であるだけでなく、京都が日本の伝統を象徴する都市であるという意味において、あるいは文化の多様性を保持する都市であるという意味において、日本人全体にとって、更には国際的にも、極めて重要です。京都創生は市民のためであるばかりではなく、日本、そして世界のための取組であり、京都創生の実現は、京都市民と京都市に課せられた使命であるともいえます。

京都市民と京都市はこれまでも、京都の文化や景観を守り、育てるため、多大の努力を傾注し、大きな成果を挙げてきました。しかしながら、グローバリズムの進展により世界の画一化に向けた流れが加速する中で、もはや、一都市の力で京都の文化や景観を守ることは非常に困難になってきました。このため、京都市では、これまでの取組を踏まえつつ、国際協調や地方分権、心の時代の到来といった大きな時代の流れに対応し、更に強力かつ先駆的な取組を進めるとともに、市民や京都市

だけの力では対応できない部分については、京都が日本の財産であることに鑑み、国に対して、京都という日本を代表する歴史都市の再生・活用という国家的見地に立った制度的・財政的な特別措置を求めています。そして市民の動きと連動した国家戦略による京都創生の推進により、日本人が誇りに思い、外国人があこがれる「美しい日本の再生」を目指します。

2 京都にとっての意義

京都は、三方をなだらかに連なる緑豊かな山々に囲まれ、街なかを鴨川、桂川などの清流が流れる美しい自然景観に恵まれると同時に、社寺や町家をはじめとする歴史的な建造物と現代文化が溶け合い、落ち着いた町並みの風情を醸し出す、日本を代表する歴史都市です。この中に、本山や著名な寺院・神社が集積し、茶道、華道、能楽・狂言、京舞などの多くの家元や宗家があり、多様な文化の摂取を行いながら、活発な活動を続けるとともに、その成果を全国、更には世界に向けて発信しています。また、歴史に培われた伝統工芸品などの「京もの」は、匠の技に支えられた優れた品質、デザインを誇り、全国、世界から高い評価を受けるだけでなく、現代の先端産業にも大きな影響を与え続けています。

しかし、一方では、グローバリズムの進展や東京を中心とする文化の影響、生活様式や価値観の変化などにより、伝統芸能や伝統文化、伝統工芸に対する関心や需要が減少し、相対的な発信力の低下や後継者問題が生じるなど、これまで京都の伝統文化を支えてきた力が希薄化しつつあります。景観面でも、平成16年3月の調査で、都心部では7年間に約13%の京町家が消失するなどまちの変容が著しく進み、京都の伝統的な生活様式と一体となった歴史的な景観が失われつつあります。

京都の魅力は、京都がいきいきと活動する大都市であるとともに、長い歴史の中で培われた質の高い日本文化を体現した独自の都市特性を有しながら生き続ける歴史都市であることにあります。したがって、「京都らしさ」が失われることは、京都の魅力の低下をもたらし、都市の衰退にもつながりかねません。

京都創生は、喪失の危機にある歴史的、伝統的な景観や文化、文化財を、守り、育て、新たに創造し、未来に伝えていくための京都を挙げた取組です。このことに

より、京都の魅力に磨きをかけ、京都の価値を更に高め、全国・世界に発信するとともに、京都の存在意義を市民自らが再認識する、非常に重要な取組であるといえます。

3 国にとっての意義

京都の文化と景観は、その永い歴史の中で全国に広がり、各地の都市の形成や文化の発展に大きな影響を与えてきました。京都の文化と景観は、日本の文化と景観の原点といえるものであり、日本人共通の財産であります。京都創生では、伝統文化や文化財、歴史的風土の保存や市街地の景観の保全・再生・創造などに取り組んでいますが、これらは京都市民のみならず、国民全体によって支えられてきたものです。京都は、我が国の歴史と文化を最もよく体現している都市であり、京都の魅力の喪失は、国家的損失であるといえます。

グローバリズムの進展による画一化の流れは、一都市の力だけで食い止められるものではありません。今日大きく変容し、喪失の危機にある我が国の歴史都市、とりわけその代表ともいえる京都の歴史的、伝統的な景観や文化、文化財を、守り、育て、未来に伝えていくことは、国全体の課題であり、国家レベルでの戦略の策定と取組の推進及びそれを支える財政的な裏づけ、すなわち国家戦略としての京都創生の取組が不可欠なのです。

現在、喫緊の国家的課題として、日本人のアイデンティティーの確立や美しい日本の再生、国際観光の振興、日本文化の継承・発信などの課題が掲げられていますが、国は、京都創生を推進し、日本を代表する歴史都市である京都を活用することにより、これらの課題を最も効率的かつ効果的に解決できるものと考えます。

4 歴史都市・京都創生策Ⅱのあらまし

(1) 歴史都市・京都創生策Ⅱの位置付けと構成

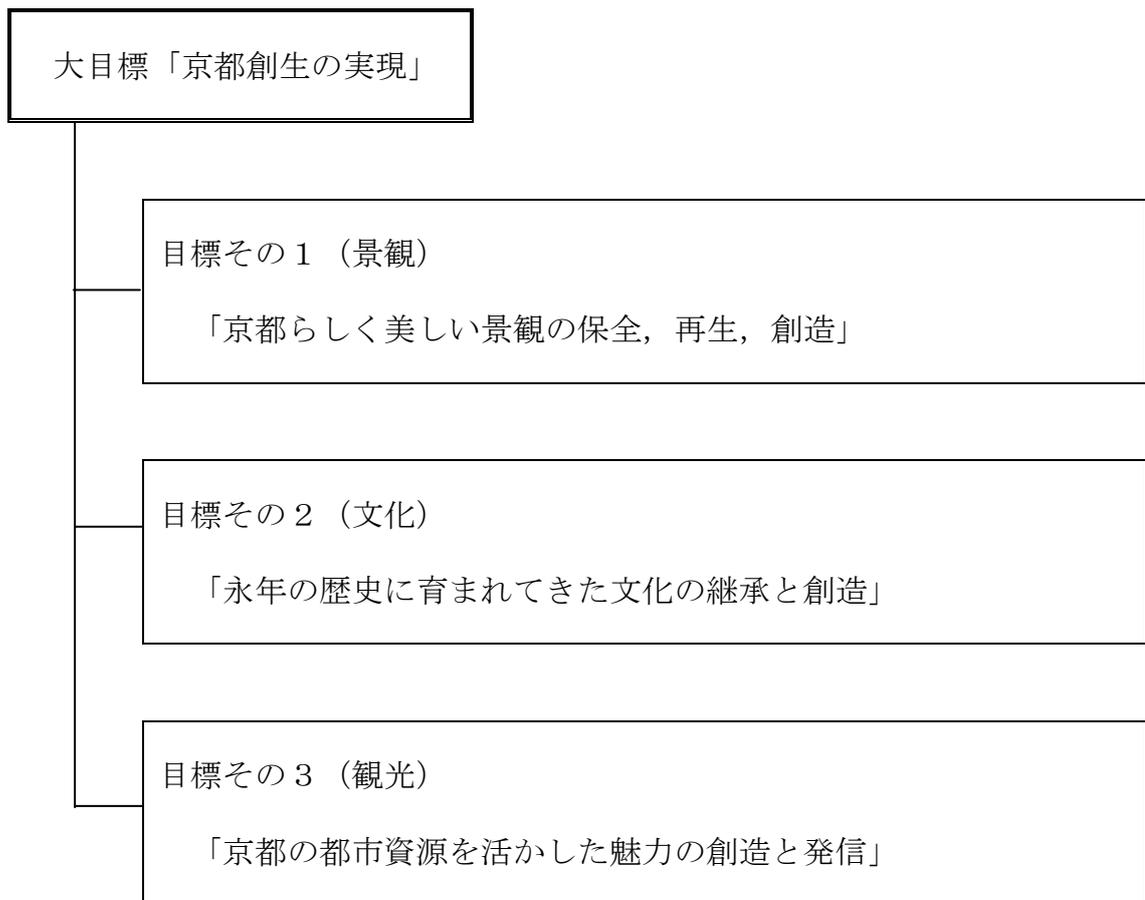
京都市では、「国家戦略としての京都創生の提言」を実現するために平成16年10月に「歴史都市・京都創生策（案）」を策定しました。

その後2年が経過し、この間、景観については「時を超え光り輝く京都の景観づくり審議会」の中間報告がまとめられ、文化については「京都文化芸術都市創生条例」、「京都市伝統産業活性化推進条例」を制定し、観光については「京都市観光振興推進計画」を策定するなど、京都創生の実現に向けた新たな取組を進めてきました。また、国との関係におきましても、国会議員連盟の設立や中央官庁の幹部職員と本市職員による日本の京都研究会の設置など、新しい動きが生まれています。

今回策定する「歴史都市・京都創生策Ⅱ」は、こうした状況を踏まえて、京都創生をさらに強力に推進するために、これまでの「歴史都市・京都創生策（案）」の内容を具体化し、京都市の今後の取組方策と国に求める措置（提案・要望）をまとめたものであり、総論、景観、文化、観光の4編で構成しておりますが、「歴史都市・京都創生策（案）」と同様に、市民や国民の皆様からも幅広い御議論・御意見をいただくことを期待しております。

(2) 歴史都市・京都創生策Ⅱの目標

歴史都市・京都創生策Ⅱの大目標と景観、文化、観光の各編の目標は以下のとおりです。



目標その1 (景観)「京都らしく美しい景観の保全, 再生, 創造」

京都は山紫水明の自然の中に、1200 有余年にわたる歴史を積み重ねてきた世界有数の歴史都市です。また、37 の大学を有する学術都市であり、多数の寺院・神社が集積する宗教都市です。一方、優れた伝統産業や先端産業が栄える産業都市であり、147 万人の市民が生活を続ける大都市でもあります。

このような多彩な顔を持つ京都の背景となる美しい自然景観や歴史的な町並みを守り、育てるために、京都市民や京都市は全力を挙げて取り組んできました。しかしながら、この京都の景観が、今、大きな危機に直面しています。

長い歴史の中で育まれてきた京都の景観の価値を改めて見直し、国や国民の皆様の支援を得る中で、この京都の景観を守り、育て、創り、まちづくりに活かしていくことは、市民と市・国などの行政に課せられた使命です。このことが、市民の地域への誇りと愛着、連帯感を育て、新たな都市の魅力や創造性を引き出すとともに、美しい日本の再生にもつながります。

京都市の友情盟約、姉妹都市であるパリ、フィレンツェ、プラハなど、ヨーロッパの歴史都市は、各都市の歴史を承継した個性ある美しさを単に守るだけでなく、更なる投資を行い、新たな魅力を創造することで、人々を魅了し続けています。京都市においても、歴史都市・京都ならではの景観を保全、再生するとともに、新たな魅力を創造し、これらの都市に勝るとも劣らない独自の美しい都市景観を創生することを目指します。

目標その2（文化）「永年の歴史に育まれてきた文化の継承と創造」

京都は、文化の多様な要素が重層的かつ複合的に存在し、また、それらが1200年以上にわたる歴史を通して市民の生活の中で受け継がれ、しかもそこから絶えず新しい文化を創造するための創意と工夫を続けてきた都市です。

今日この地に残る様々な優れた文化は、日本の都であったこととの関連で形成されてきました。江戸時代においても政治とは距離をとる形で多数の文人・芸術家がこの地に集まり、多様な芸術文化が生みだされ、それが日本各地へと伝えられました。さらに、明治維新の後も京都の文化は近代的な産業や大学との密接なかかわり

の中で生き続け、今日に至っています。

また、京都はあらゆる領域で日本文化の中心であったために、芸術文化が広く京都市民の生活の中に浸透し、享受され、ごく日常的な暮らしの中にも息づくこととなりました。産業も、茶道、華道、能楽などの芸術から精神的な影響を受け、逆にまたこれら様々な領域の芸術を支えるかたちで発展してきました。

しかしながら、グローバリズムの進展や生活様式の変化の中で、京都のこれらの文化の多くは今や危機に瀕しています。このまま放置すると、こうした文化のあるものは消滅してしまいかねません。そして京都の文化や文化財が失われてしまうことは、日本の伝統文化や日本人の心が失われてしまうことになり、本来の日本の姿を正しく海外に伝えるという観点からも大きな損失です。

ゆえに、市民と市・国などの行政が力を合わせ、永年の歴史に育まれてきた文化の継承と創造に取り組むことで、独自の個性ある文化芸術都市を創生することを目指します。

目標その3（観光）「京都の都市資源を活かした魅力の創造と発信」

我が国の文化を世界に向けて発信することで、日本の姿を正しく理解してもらうことの重要性が主張される現在、景観、文化の両面において日本を代表する歴史都市である京都ほど、「観光」の有する「国の光を観せる、観る」という意味を体現するのにふさわしいまちはありません。また、京都の有する都市資源である「光」を、国内外に発信し、多くの人々との交流を深めることは、文化を創造し、相互理解を深め、日本文化の拠点都市としての能力を発揮する大きな原動力にもなります。

現在、国では「観光立国」をうたい、訪日外国人旅行者の増大を目指した「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を、官民一体となって推進しています。観光立国

懇談会の報告書では、「今、なぜ観光立国か」と題して、グローバリズムが促す大交流、高まる文化交流の役割、人間重視の時代などの項目について触れています。また「国の光を観る」ことがまさに観光の原点であること、住んでよし、訪れてよしの国づくりを進めていくこと、文化の磁力を充実していくことの大切さについて語っています。国内外から年間 4700 万人を超える観光客が訪れる京都こそこれらを担う都市として最もふさわしく、京都市が進めている京都創生の取組によって貢献できると考えます

観光施策の展開による、景観・文化等の都市資源を活かした魅力の創造と国内外への発信により、歴史都市・京都を創生し、美しい日本を再生することを目指します。

5 京都創生の実現に向けて

京都創生の実現のためには、その主たる担い手である京都市民と京都市が、京都の持つ価値を正しく認識し、自らが主体的に取り組んでいくことが大切です。すなわち、市民は「京都らしさ」の維持・再生・創造に努め、京都市は必要な政策・施策を展開していく必要があります。

しかしながら、一都市による取組には財政面や制度面で限界があり、日本の歴史文化の象徴の地である京都を保全・再生・創造するためには、国家戦略としての取組が必要です。とりわけ、京都創生を推進するための制度の創設や制度的・財政的な特別措置を取りまとめた「歴史都市京都創生特別措置法（仮称）」の制定が必要です。また、財政面においては、広く国内外から京都創生のために必要な資金を集

めることも重要です。

京都創生を実現することは、京都の魅力をさらに高め、日本人のアイデンティティの確立や美しい日本の再生、日本文化の継承・発信等、国家的課題の解決にも直結します。京都創生を実現するためには長い時間を要しますが、この取組が、京都にとって、更には日本の未来にとって極めて重要な意味を持つことに鑑み、京都市も全力を挙げて取り組んでまいります。